

○調査研究課題名 「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」

○代表者名 「 鶴田清一 」

○中核機関名 「 大阪大学 」

調査研究の目標・概要

1. 目的

本調査研究では、医療福祉・教育・科学技術評価などの分野における新しいコミュニケーションモデルの開発と実践を目的とする。そのために、従来の先端的科学技術の概念そのものを拡張し、生活者の実感とリンクする、新たなケア文化の創出への施策を提言する。

この背景として、専門家と一般国民との間に適切なインターフェイスが欠如していた従来の状況がある。すなわち、専門家が人間を所与のものとして固定的に捉えており、政策立案や、社会経済的意思決定もその限界を出ないという弊害があった。他方で生活者も自分たちの実感を各臨床現場や政策立案過程に反映させる適切なチャンネルを持たなかつた。

2. 内容

第一に臨床コミュニケーションのネットワーク形成についてヒアリングならびに文献調査を行い、我が国の問題点や諸外国と共にEU(デンマークやオーストリア)の科学技術評価の手法を調査するとともに、領域横断的なコミュニケーションモデルの構築および政策プランニング過程への対話的技法の導入を試みる。

第二に対人援助の各分野におけるクライアントの側に立ったコミュニケーション実践を調査研究し、その卓越性をまとめて、具体的な案件について専門職と受益者とのインターフェイスを促進するコミュニケーションモデルを提案する。そのために、ライフサイエンスを「生活」科学として捉える。

第三に、上記2つの作業と連係しつつ、臨床諸科学の統合プログラムを作成し、ハイテク文明の中でバランスのとれた人間観を確立する基本理念の策定を提言する。

3. 個別の・融合的視点

第1に、臨床コミュニケーションの現場(医療・介護・調停)に関連して、医学や法学などの枠を超えた人文科学との協同、第2に横断的コミュニケーション構造の実践理論(科学技術評価など)に関連して、人文・社会科学と自然科学・工学との協同、第3に臨床諸科学の統合と人間観の構築に関連して、哲学・倫理学と他の人文科学・社会科学・自然科学との協同をめざす。

4. 一般からの意見の反映方法

ホスピス・看護大学・介護施設などの職員や患者・入所者、NPO(日本ホスピス・在宅ケア研究会)の関係者などからヒアリングを行うほか、ワークショップ(参加型学習)を行う。科学技術評価に関しては、一般国民参加型テクノロジーアセスメント(コンセンサス会議、シナリオ・ワークショップなど)を実施して、一般各層からの意見を反映する。

調査研究により期待される提言

1. 臨床死生物学などの観点を反映する、臨床コミュニケーション活性化に向けての方策を提示する。

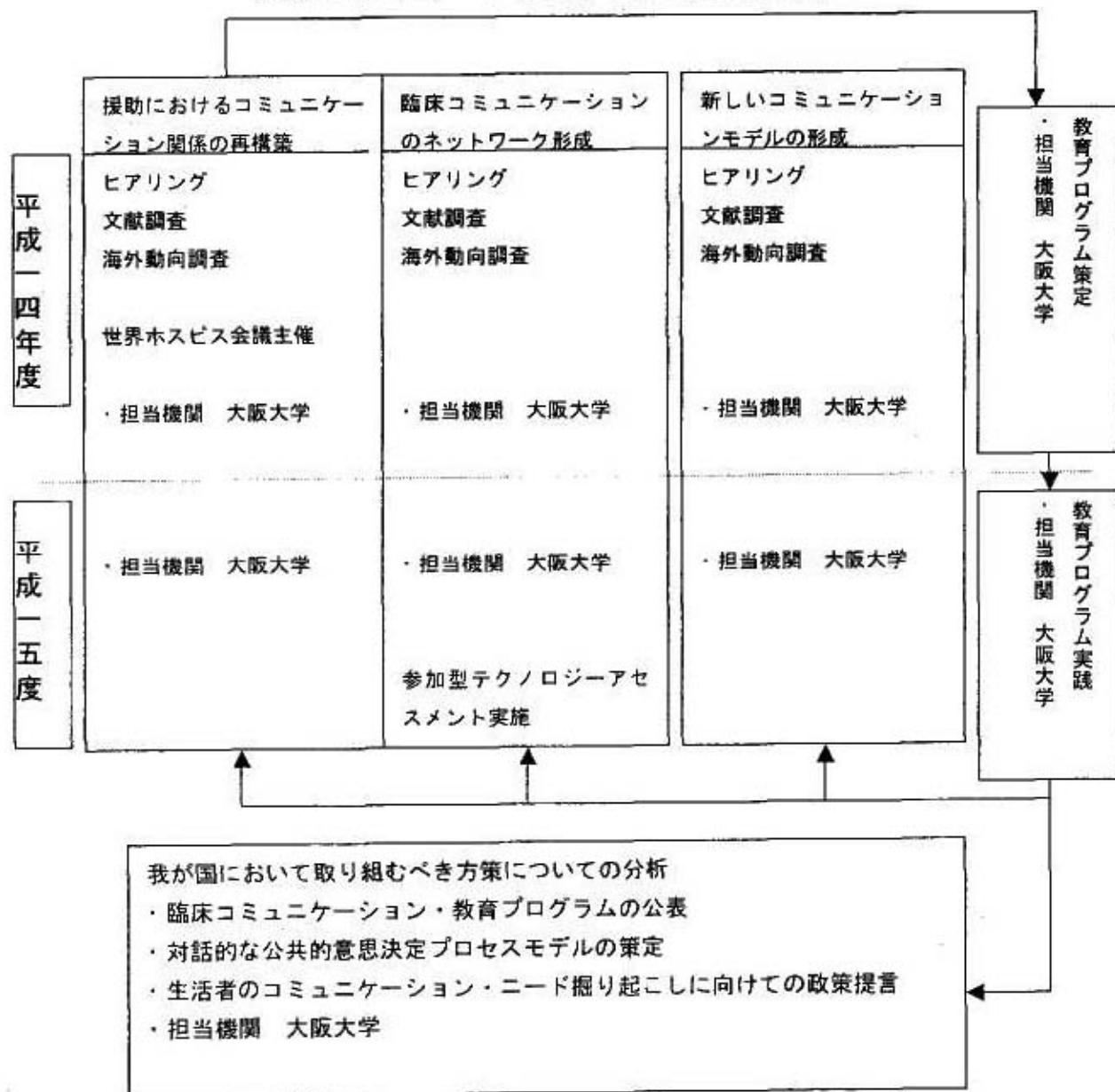
2. 一般国民が科学技術に関する政策決定に参加するモデルを提示し、領域横断的なコミュニケーションを構造化する方策を提示する。

3. 社会経済を活性化させる新たなコミュニケーション・ニードの掘り起こしに向けて、政府が行うべき施策について提言をとりまとめる。

調査研究体制

- 調査研究課題名 「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」
 ○代表者名 「 鶴田清一 」
 ○中核機関名 「 大阪大学 」

臨床コミュニケーションのモデル開発と実践



期待される提言

- (1) 臨床死生学などの観点を反映する、臨床コミュニケーション活性化に向けての方策を提示する。
- (2) 一般国民が科学技術に関する政策決定に参加するモデルを提示し、領域横断的なコミュニケーションを構造化する方策を提示する。
- (3) 社会経済を活性化させる新たなコミュニケーション・ニードの掘り起こしに向けて、政府が行うべき施策についての提言を取りまとめる。